

被爆による奇形化とマンガ表現

——石ノ森章太郎「サイボーグ 009」の描き換えを軸として——

創価大学文学部 森下達

1 目的

1964年に連載が開始された石ノ森章太郎の代表作「サイボーグ 009」は、世界各国から集められ、サイボーグに改造された9名が、彼らを改造した死の商人に立ち向かうという筋立てであり、主役のサイボーグ戦士の描き分けがマンガのステレオタイプを考える際に興味深い事例としてしばしば言及されている（吉村・田中・表 2007 など）。石ノ森は社会問題を作中に取りこむことも多く、60年代には核戦争を扱った作品も多く執筆している（山本 2015）。そのうちの一つである「サイボーグ 009」の一篇「移民編」（1968年）では、初出時には被爆による身体奇形の描写が見られたが、現在の版では描き換えられている。この描き換えの実態と経緯を分析することで、表現をめぐる社会的な動きが作品に与えた影響を論じると共に、マンガ表現のステレオタイプ性について考察を深めることが本発表の目的である。

2 方法

「移民編」では、未来人がタイムマシンを用い、現代世界を侵略する。1980年代に勃発した核ミサイル戦争のため、彼らはみな何らかの身体奇形を抱えている。現在の版では、この設定が、異常発達した昆虫などに襲われたせいで身体の一部を欠損したと変更されている。

ステレオタイプの表現は、登場人物の属性や役割を読者にわかりやすく伝える、マンガに必須の手法であるが、その一方で常に偏見・差別と隣り合わせにある（金水 2008）。「移民編」は、発表時は問題視されなかったステレオタイプの被爆者表象が、後年になって差別と認識された事例と捉えられる。こうした観点から「移民編」を取り上げ、山中 2011 などマンガの記号的表現についての議論を参照しながら、同作の表現の分析を行う。

3 結果と結論

現時点で入手している単行本を見たかぎり、描き換えは1970年代末に行われたと推測される。70年代はマンガや映画における差別表現がさまざまに問題になった時期でもあった。図書館や古書店を利用して資料を入手し、改変の時期を絞った上で、石森プロやファンクラブへのインタビューを行い、描き換えの背景を調査できればと思う。また、描き換え後の「移民編」には、奇形化した人間を描いた絵だったものが、多少の模様を描き足すことで巨大化した虫の絵として機能させられている箇所がある。描き換えが行われたのは、マンガ図像が被爆者という現実のカテゴリに対応していると考えられ、そこに差別性が見出されたからだろう。にもかかわらず、それゆえの描き換えが、マンガの絵が現実の存在を写し取ったものではない（人間と虫がほぼ同じ絵で表現できる）ことを示してしまっている。この事実は、記号的表現と記号的使用とを分割して考えることが（岩下 2013）、マンガのステレオタイプ性を分析する際にも必要であることを示している。

文献

岩下朋世, 2013,『少女マンガの表現機構 ひらかれたマンガ表現史と「手塚治虫」』NTT出版

金水敏, 2008,「日本マンガにおける異人ことば」, 伊藤公雄編『マンガのなかの＜他者＞』臨川書店, pp.14-61

山本和宏, 2015,『核と日本人 ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』中公新書, 中央公論新社

山中千恵, 2011,「＜マンガと差別＞を考えるために」, 荻野昌弘編『差別と排除の「いま」③ 文化・メディアが生み出す排除と解放』明石書店, pp.171-205

吉村和真・田中聡・表智之, 2007,『差別と向き合うマンガたち』臨川書店